ISSN:0918-7936

No.22 (May 2010)

The Gaskell Society of Japan Newsletter

日本ギャスケル協会ニューズレター

会長就任にあたり

日本ギャスケル協会会長　多比羅　眞理子

ギャスケル生誕 200 年という記念すべき年に会長職を仰せつかり大変光栄に存じます。同時に、会長という重責を全うできるだろうかという不安と緊張とが入り交じっております。会員の皆様、どうぞ、二年間よろしくお願い申し上げます。

昨年 2009 年に日本ギャスケル協会は創立 20 周年を迎えました。私は初代会長の山脇百合子先生のもと、当初は事務局員として、1997 年から 9 年間二代目の事務局長を、続く鈴江璋子先生の時代には、事業計画委員長として 4 年間務めさせていただきました。まさに私自身の過去 20 年間は日本ギャスケル協会と共にあったと思っております。その協会は 1988 年、山脇先生の慈母に似た深い愛情に包まれて日本の英文学界に誕生の産声をあげ、次に鈴江先生の力強いリーダーシップにより、よちよち歩きの幼子が独り立ちをし、世の大人たちと対等に互して生きる力を得ました。その成長ぶりには、目を見張るものがあります。この成長を可能としたのは、歴代の会長、そして、役員の皆様、更にはこの協会を支える会員の方々のギャスケルを愛する気持ちの賜物に他なりません。これは本協会の大きな財産であり、一番の誇りでもあります。

しかし、昨今の様々な変革の波が大学を含む教育の現場にも押し寄せ、私たちにとっての命綱である研究や学会活動も思うに任せられなくなってきています。こうした難しい時代を迎えて協会が更に発展を続けるには、今まで以上に魅力に満ち、会員を強く引き付ける活動が要求されます。では私たちに何ができるでしょうか。まず第一に私たちに求められるのは、ドネーションと同じく私たち会員それぞれが、できる範囲で、そしてできる力で協会の活動に関心を持ち、参加する事ではないでしょうか。そして、何にもまして大切なこと、それは、ギャスケルを心から愛することだと思います。私はこの思いを胸に、微力ながらも、会員の皆様と共にこの協会の発展のために、新年度の第一歩を踏み出して参ります。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

研究活動を充実させましょう――「日本ギャスケル協会」副会長就任挨拶

日本ギャスケル協会副会長　大野　龍浩

1988 年協会発足当時の会員数は 83 名。現在は 122 名。21 年間に 39 名、1 年あたり約 2 名増えたことになる。しかし、ブロンテ協会やオースティン協会と比べると、当協会が活気に劣るのは否めない印象を受ける。加入者数をもっと増やすためには、協会や会員が地道に学会活動や研究を続けて、ギャスケル文学の力を世の中に発信していくしかない。

わたしが『シルヴィアの恋人たち』で卒論を書いた頃、和文の研究書は山脇百合子『ギャスケル研究』（北星堂）しかなかった。しかし、この 30 年間に数々の研究書や論文、翻訳が日本で出版され、いまやギャスケルの名を知らない英文学者はいない。今年 9 月には生誕 200 年を記念する論文集が 2 冊刊行される。これからも会員がリーダーシップをとってますます研究活動を充実させていきましょう。

じつはわたしもひそかに愛好者を増やす努力をしている。毎年「英文学史」の講義ではかならず彼女の紹介に 1 週使う。生涯をまとめた自作 DVD や、作品の映像を使って、受講生の理解に供する。そのせいかどうかはわからない

が、勤務校では過去 15 年間に卒論や修論でギャスケルを扱った学生は 7 名。いま、博士課程の学生が一人、彼女をテーマに論文を準備している。

ギャスケル文学の特徴の一つはキリスト教道徳に基づく高い倫理性にある。19 世紀に活躍したジェイン・オースティン、エリザベス・ギャスケル、アン・ブロンテの 3 人は、いずれも牧師の娘たち（ギャスケルの父は一時ユニテリアン派の牧師を務めた）で、とくに信仰心が篤い。価値観が多様化した現代だからこそ、揺るがない道徳観を持った彼女たちの作品が感銘を与えるのだろう。これからも、わたしにできる仕方で、彼女の魅力を発信していきます。

新会長の多比羅先生は、設立当初から、ずっと協会の発展を支えてこられた。長く事務局長も務められたので、内外の事情をもっともよく知る会員の一人だ。物理的に遠い熊本の地からどれだけのことができるか不明の部分が多いが、できるだけのことはさせていただく所存。現事務局長の諸坂先生や在京の役員諸氏の協力を仰ぎながら、精一杯、会長を支えていきたいと思います。

ギャスケル協会の一層の発展を祈りつつ

前会長・実践女子大学名誉教授 鈴江　璋子

青葉の眩しい頃となりました。皆様お元気にご活躍でいらっしゃいますか。お蔭様で私は今年 3 月に、2 期 4 年の任期を満了いたしました。私が会長を務めさせていただいた 2006 年 4 月から 2010 年 3 月までの、この期間は、協会設立 20 周年を迎えるとともに、ギャスケル生誕 200 年を視野に入れた展開が求められる、多事多端な時期でしたが、一応目標は達成し、大過なく任務を終えることが出来たように思います。これもひとえに会員の皆様のご理解、ご支援のたまものと、厚く御礼申し上げます。

長いようで・・・本当に長かったこの期間の初仕事は、英国協会事務局長のジョーン・リーチさんを招聘して例会で講演していただく準備と、付随する歓迎行事のスケジュールを立てることでした。寄附を募ったり、ガイド役を依頼したり、前年の秋から慌ただしく動いて、さて 2006 年 6 月 3 日、満員の聴衆の前に姿を現したリーチさんは、茶色の目をパッチリ、音吐朗々、全身にエネルギーを漲らせて、私たちの期待に応えてくれました。その後、各地の会員のお世話で、名古屋、京都、熊本と旅行し、無事帰英されたのですが、会員の協力の素晴らしさに、まず私が感激、それがその後の私のエネルギーになりました。

私はもともと書斎派で、イヴェント派ではないのですが、その後も行事は続き、2007 年 1 月には私学会館で『ギャスケル全集』完成祝賀会を開催、2008 年には神戸大学で、協会設立 20 周年を盛大に祝いました。『ギャスケル論集』第 18 号は「日本ギャスケル協会設立 20 周年記念号」です。この大会には、刷り上ったばかりの『ギャスケル全集別巻Ⅰ　短編・ノンフィクション』が運び込まれました。エレベーターのない会場に、出版社の社長自身が、この新刊書の入った重い段ボールを運び上げてくださったのでした。『別巻Ⅱ』は翌 2009 年 3 月出版。この 2 冊の翻訳出版が協会設立 20 周年の記念事業です。

ギャスケル生誕 200 年祝賀のためには記念論文集とギャスケル展を準備しました。

『ニューズレター』も 2006 年から新しくしました。題字を含めて現在の形を創ってくださったのは宮丸裕二編集者で、新しい時代にふさわしい、立派な『ニューズレター』になりました。2007 年からは市川千恵子編集者が意欲的に活動され、パッツィ・ストーンマン教授やジョアン・シャトック教授の原稿で『ニューズレター』の質を高めてくださいました。2009 年、第 21 号は薄墨桜を思わせるデリケートな色合いでした。

エリザベス・ギャスケル生誕 200 年を祝う 2010 年の今号からは矢次綾幹事が編集者です。情熱溢れる紙面ですね。協会員の交流をはかり、ギャスケル研究の状況を伝え、国際的な視野を持つ機関紙として『ニューズレター』がますます充実していきますように。

役員・幹事もここで半舷交代です。力強く私を支えてくださった東郷秀光副会長、幹事・委員長の皆様、諸坂成利事務局長、そして会員の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。政治経済が表面に出ればこそ、深いところで文学が求められる現代です。新会長のもとで日本ギャスケル協会が一層発展しますよう、心からご期待申し上げます。

第 21 回例会レポート

第 21 回例会プログラム
日　　時：2009 年 6 月 13 日（土曜日）
　　午後 2 時 30 分より
会　　場：日本大学法学部本館 2 階第 1 会議室
総合司会：熊倉朗子（大妻女子大学非常勤講師）
開会の辞：日本ギャスケル協会会長　鈴江璋子
　　（実践女子大学名誉教授）
ワークショップ：『ギャスケル全集別巻Ⅰ、Ⅱ
　　短編・ノンフィクション』合評会
挨　　拶：多比羅眞理子
　　（『ギャスケル全集別巻Ⅰ、Ⅱ　短編・ノンフィクション』編集長・実践女子大学非常勤講師）
ワークショップ・コーディネーター：松岡光治（名古屋大学教授）
第 1 部（短編）司会：松岡光治
第 2 部（ノンフィクション）司会：鈴江璋子
閉会の辞：日本ギャスケル協会副会長　東郷秀光（慶應義塾大学名誉教授）

2009 年 6 月 13 日土曜日、第 21 回目を数える日本ギャスケル協会例会が日本大学法学部本館 2 階第 1 会議室において開催された。今例会におけるワークショップは、日本ギャスケル協会創立 20 周年記念企画の一環として 2008 年 9 月に第Ⅰ巻を、続いて翌 2009 年 3 月に第Ⅱ巻を上梓した『ギャスケル全集別巻Ⅰ、Ⅱ　短編・ノンフィクション』を取り上げた合評会であった。

本会は先ず鈴江璋子会長による開会の御言葉をもって幕を開け、続いて『ギャスケル全集別巻Ⅰ、Ⅱ　短編・ノンフィクション』出版にあたりその舵取りを担われた多比羅眞理子編集委員長によるご挨拶を受けて、ワークショップへと移った。

合評会は松岡光治氏をコーディネーターに据え、同氏の司会進行による第 1 部、鈴江璋子氏司会進行による第 2 部の 2 部構成となった。この各部門を更に第 1 部短編部門では「愛」、「歴史」、「地方色」、「ゴシックとミステリー」、「ユーモアとペーソス」の 5 セクション、第 2 部ノンフィクション部門においては「個人的な記録」、「記録と考察」、「書評」の 3 セクションに分け、それぞれのセクションの担当者が事前に翻訳者より寄せられた各短編のレジュメを元にその補足説明や会場からの質疑を求めながら各々のセクションの主旨を明確にしていく、という流れで進められた。翻訳者より事前に寄せられたレジュメは総計 36 点。 翻訳に携わられた担当者個々人の抱く拘りや想いも察せられる中、これらは制作過程や翻訳そのものに対してではなく敢えて各作品のテーマ及び問題点に主軸を据えた、松岡氏曰く「ショート・ショート・研究発表」であり、この点のみでも今回の合評会がワークショップ 7-8 回分には相当するであろう重層性と濃度を併せ持つものであることが窺い知れる。事実、セクション担当者及び翻訳者より提示された解釈や問題点が新たな側面・視点を生み出し、更なる疑問や課題を浮かび上がらせることで拡がりを見せ、当初予定されていた 2 時間半を上回る 3 時間に及ぶものとなっても会場全体に満ちた熱気は終始冷めることはなかった。各セクションの担当者、レジュメを元に取り上げられた短編及び翻訳者は次のとおり。

・第一部短編部門
　セクション 1　「愛」　担当：大野龍浩氏
　　東郷秀光氏訳「やっと順調に」（1858）、木村正子氏訳「手と心」（1849）、多比羅眞理子氏訳「ジョン・ミドルトンの心」（1850）、「ベッシーの家庭の苦労」（1852）、大野龍浩氏訳「曲がった枝」（1859）の計 5 編。

セクション２ 「歴史」 担当：矢次綾氏

東郷秀光氏訳「チェシャーの習慣」(1838)、江澤美月氏訳「ペルシャ王に仕えた英国人庭師」(1852)、武井暁子氏訳「呪われた民族」(1855)、閑田朋子氏訳「モートン・ホール」(1853)、阿部美恵氏訳「現代ギリシャ民謡」(1854) の計５編。

セクション３ 「地方色」 担当：直野裕子氏

直野裕子氏訳「マーサ・プレストン」(1850)、「ペン・モーファ村の泉」(1850)、松村豊子氏訳「カンバーランドの羊毛狩り」(1853)、矢次綾氏訳「一時代前の物語」(1855)、金山亮太氏訳「グリフィス一族の運命」(1858)、足立万寿子氏訳「ヘッペンハイムの六週間」(1862) の計６編。

セクション４ 「ゴシックとミステリー」 担当：長瀬久子氏

廣野由美子氏訳「ばあやの物語」(1852)、石塚裕子氏訳「クロウリー城」(1863)、玉井史絵氏訳「貧しきクレア修道女」(1856)、田中孝信氏訳「本当なら奇妙」(1860)、長瀬久子氏訳「怪談の断章二編」(n.d.) の計５編。

セクション５ 「ユーモアとペーソス」 担当：松岡光治氏

長瀬久子氏訳「クランフォードのケージ」(1863)、関口章子氏訳「クリスマス――嵐のち晴れ」(1848)、木村晶子氏訳「ハリソン氏の告白」(1851)、松岡光治氏訳「リビー・マーシュの三つの祭日」(1847) の計４編。

・第二部ノンフィクション部門

セクション１ 「個人的な記録」 担当：市川千恵子氏

長浜麻里子氏訳「死産の女児の墓に詣でて」(1836)、「貧しい人々のいる風景」(1836)、宇田朋子氏訳「日記」(1835-38)、中村みどり氏訳「おもてなしの仕方」(1854)、市川千恵子氏訳「フランス日記」(1864) の計５編。

セクション２ 「記録と考察」 担当：宮丸裕二氏

足立万寿子氏訳「イングランドの前世代の人々」(1849)、波多野葉子氏訳「『カプレーラでのガリバルディ』英訳版序文」(1862)、「イタリアの組織」(1863)、宮丸裕二氏訳「まがいもの」(1863)、「ロバート・グールド・ショー」(1851) の計５編。

セクション３ 「書評」 担当：鈴木美津子氏

鈴江璋子氏訳「『アシニアム』掲載評論」(1851)、「エマソンの連続講義」(1847)、鈴木美津子氏訳「ランカシャーの教訓」(1865) の計３編。

以上。

先にも述べたように、当初の予定を大幅に延長するほどの盛り上がりを呈した本ワークショップをご報告させていただくにあたり、各セクション及び各短編ひとつひとつに込められた担当者の方々の意図をここでまとめるには筆者の拙筆では限界がある。よって、ここではリストとしての体裁を取るに留めさせていただくが、2009 年 7 月発行の『ギャスケル論集第 19 号』において、当日配布されたものに更にこのワークショップを経たうえでの各担当者、翻訳者による加筆がなされたレジュメが掲載されている。是非ご一読いただき、筆者の苦しい弁明へのご理解を賜れれば幸いである。

当日は関東甲信の入梅宣言がなされた直後であり、午前中こそ空は重苦しい雲に覆われていたが、会場の熱気に圧されたかの如く午後にはその雲も一掃され、多くの参加者が抱いていたであろう盛会の熱と余韻に水を差されることなく帰途につくことが適った。また、途中埼玉大学教育学部教授、宇田和子氏より会場にパウンドケーキが振舞われるという、食文化から文学を考察する氏による洒脱な課題提議が披露される一幕もあった。20 年に渡る協会の歴史と変遷のモニュメントともいえる『ギャスケル全集』刊行の完結を受けてのこの合評会は、一つの総括であると同時に今後のギャスケル研究の可能性をも示唆する意義深いものとなった。

（熊倉　朗子）

第 21 回大会レポート

第 21 回大会プログラム
日　　時：2009 年 10 月 4 日（日）午前 10 時より
会　　場：日本大学法学部 10 号館 1011 講堂
総合司会：阿部美恵（松蔭大学教授）
開会の辞：日本ギャスケル協会会長　鈴江璋子
（実践女子大学名誉教授）

研究発表：
１．司　会　足立万寿子
（ノートルダム聖心女子大学教授）
発表者　木村正子（京都女子大学非常勤講師）
「演技する女性たち―『妻たちと娘たち』における母娘関係―」
２．司　会　大野龍浩（熊本大学教授）
発表者　関口章子（北里大学非常勤講師）「追う者と追われる者のユニテリアニズム」
総　　会：
司　会　事務局長　諸坂成利（日本大学教授）
シンポジウム：「ギャスケルと英国小説の伝統」
司会と講師　鈴木美津子（東北大学教授）
講　師　　玉崎紀子（中京大学非常勤講師）
講　師　　木村晶子（早稲田大学教授）
講　師　　波多野葉子（筑波学院大学教授）
講　　演：
司　会　井出弘之（東京都立大学名誉教授）
講　師　海老根宏（東京大学名誉教授）「船乗りの帰還―オースティン、ギャスケル、ハーディ―」
閉会の辞：　日本ギャスケル協会副会長　東郷秀光　（慶応義塾大学名誉教授）

研究発表

１．「演技する女性たち―『妻たちと娘たち』における母娘関係―」

木村氏はまず、文学において女性が演技・偽装することの意味を分析し、これは一時的に相手を支配して優位な立場を得る一方、その代価として自己放棄を余儀なくされる諸刃の剣であると指摘する。これを『妻たちと娘たち』において、ミセス・ギブスンと、その娘シンシアの乖離した母娘関係が修復するプロセスの中で検証し、ギャスケルは最後の長編小説となる本作品において、娘、妻、母の安定した関係を確立したとまとめる。

２．「追う者と追われる者のユニテリアニズム」

関口氏は、宗教は信ずる者を精神的に保護するのと引き換えに、何らかの忠誠を要求するものであるとし、本人の意図を超えて特定の信仰を奉ずるが故の葛藤が表れ、その葛藤に捕われ追われて作家はその束縛を登場人物を通じ作品で発現すると考える。氏は母としてユニテリアンとしての立場から生じる葛藤を *Mary Barton*,*Cranford*, *Ruth* などを引証し、ギャスケルは宗派を超えた良心と善意を描いたと論じる。

シンポジウム：「ギャスケルと英国小説の伝統」

シンポジウムの目的は、英国小説の様々な伝統がギャスケルの作品にどのように取り入れられ活かされているかを跡付け、ギャスケル文学の独自性を明らかにすることであるとする。

1．「英国小説におけるロマンスの伝統と『妻たちと娘たち』」

玉崎氏は、イギリス小説が誕生する以前の 16-17 世紀に流行した散文ロマンスの南欧騎士物語に倣って、メアリ・ロースによって『ユレイニア』が出版された経緯を述べ、次に『妻たちと娘たち』に登場する対照的な女性モリーとシンシアのロマンスを物語の中心的課題“constancy”との関係で分析し、17 世紀のロマンスの伝統が『妻たちと娘たち』に流れており、『ユレイニア』が女性小説の始まりであると結論づける。

2．「ゴシック文学とギャスケル―メアリ・シェリーとの比較から」

木村氏はギャスケルにとってのゴシックを、メアリ・シェリーと比較しながら考察する。ゴシック小説の成立からヴィクトリア朝におけるゴシックの意味、メアリとギャスケルの生涯を考察し、『フランケンシュタイン』がメアリの唯一のゴシック小説であるのに対し、ギャスケル場合は短編にゴシック的要素が多く見られるとし 4 つの短編を分析し、ゴシック小説の特徴の一つである恐怖は家父長制度における恐怖であり、ゴシック小説を当時の家父長制度に対する批判とみる。

3.「オースティンとギャスケルに見られるメリトクラシー」

波多野氏はオースティンとギャスケルの作品に描かれる異なる階級観の結婚を具体的に検証し、このような結婚を通じ二人の作家は、プロフェッショナルが活躍する時代、能力・実力主義社会の到来を描いていると論じた。しかし、前者が伝統的なジェントリーの職業であったプロフェッショナルにヒロインの未来を託しているのに対し、後者は新しい時代のプロフェッショナルと資本家の資質も評価していることについて、作家が生きた時代と出身階級が異なることに起因するとまとめた。

4．「ロマン主義時代の歴史小説と『北と南』」

鈴木氏はロマン主義時代の歴史小説がギャスケルに大きな影響を与えたとし、シドニー・オーエンソンやサー・ウォルター・スコットの作品が『北と南』へ与えた影響について考察する。氏は歴史小説の基本的な枠組みを、異文化体験の旅、インターマリッジ、女主人公が主導権を握る設定に政治的メッセージを込める、として捉え、この枠組みにそって『北と南』を分析し、『北と南』の意図が英国国教会の社会的・政治的な特権に対する抗議・批判であり、社会の進歩や変化を描いていると結論づける。

講　演：「船乗りの帰還―オースティン、ギャスケル、ハーディ―」

海老根氏は英国小説における帰還の描写について、リアリズムとロマンスの対立と融合の観点から、オースティンの *Persuasion*、ギャスケルの *Sylvia's Lovers*、ハーディの *The Mayor of Castebridge* の三作品を取り上げ、物語の中で帰還に関わる主要な登場人物について詳細に分析された。その結果、*Persuasion* はリアリズムに結合したロマンスであり、*The Mayor of Castebridge* はロマンスとリアリズムの融合がロマンスと悲劇の融合に変化した傑作であるが、*Sylvia's Lovers* は様々な要素が混合したため、ギャスケルの他の作品に比較して完成度が低く、ギャスケルがリアリズムとロマンスの融合に苦悩した結果だとまとめられた。ゆったりとした独特な語り口の海老根氏のご講演は深い学識と文学への造詣に満ち、聴衆を魅了するものであった。

総会は諸坂成利事務局長によって進行した。会計報告、『ギャスケル論集』の投稿規定に関する審議に続いて、鈴江璋子会長からウエストミンスター寺院の Poets' Corner のステンドグラスにギャスケルの名前が刻まれること、日本ギャスケル協会設立 20 周年記念事業の『別巻Ⅰ＆Ⅱ、短編・ノンフィクション』の完成・出版の報告がされた。本大会は役員改選の年であることから、新たに会長に就任した多比羅眞理子氏、副会長の大野龍浩氏をはじめ、選任、再任された役員が紹介され、最後に多比羅眞理子氏が就任の挨拶を行った。

閉会の辞が慶応義塾大学名誉教授東郷秀光氏によって行われたあと、本大会で退任される会長の鈴江璋子氏と副会長の東郷秀光氏に、多比羅眞理子氏から感謝の言葉と共に花束が贈呈された。懇親会は『別巻Ⅰ＆Ⅱ、短編・ノンフィクション』の完成・出版を祝う祝賀会も兼ねて行われ、松村昌家氏、内田能嗣氏に続いて出席者全員が挨拶を行い、なごやかな歓談の内に会は終了した。

（阿部　美恵）

事　務　局　報　告　（平成 21 年度）

平成 21 年度日本ギャスケル協会第 1 回役員会報告

日時：平成 21 年 6 月 13 日（土）午前 11 時より午後 1 時 30 分、会場：日本大学法学部本館第一会議室、出席者：鈴江璋子、東郷秀光、石塚裕子、市川千恵子、大野龍浩、木村正子、熊倉朗子、島高行、関口章子、多比羅眞理子、直野裕子、波多野葉子、廣野由美子、松岡光治、松村豊子、諸坂成利、矢次綾、欠席者（委任状提出）阿部美恵、井出弘之、議題：1、入退会、新入会員：野津友里子（シェフィールド大学大学院生）、齊木愛子（熊本大学大学院生）、桐山恵子（和歌山大学准教授）、玉森彩弥香（大阪市立大学大学院生）、太田美和（中央大学教授）、退会者：佐藤恵里子、久永東輝夫、日浅和枝。2、役員改選：次期会長に多比羅眞理子氏、次期副会長に大野龍浩氏、次期事務局長に諸坂成利氏が指名され、全員一致で承認された。役員会組織については、後掲の総会報告参照。なお任期は、11 期任期：平成 20 年 4 月 - 22 年 3 月、12 期任期：平成 22 年 4 月 - 24 年 3 月。3、倫理規定：直野委員長より「日本ギャスケル協会倫理規定案」が提案され、一部修正を経て承認された。総会報告参照。4、投稿規定：後掲総会報告参照。5、平成 21 年度行事：『論集』第 19 号についての報告、第 21 回大会プログラム案について審議がなされた。また事業計画委員会より、大会懇親会は『ギャスケル全集』完成祝賀会を兼ねる件、ギャスケル生誕 200 周年記念論文集出版委員会より進捗状況、会則検討委員会より事務局の所在に関する付則につき確認と報告があった。6、平成 22 年度行事予定：第 22 回例会会場には日大法学部、第 22 回大会会場には東京都日野市の実践女子大学、10 月 3 日 (日) を予定する案が承認された。7、事務局報告：ニューズレター 21 号の完成、およびホームページ英語表記について報告と提案がなされた。また、平成 19 年度会計報告書、平成 20 年度支出一覧、会費収入一覧表が資料として配布され、確認後承認された。次回役員会は 10 月 3 日（土）日大法学部にて開催予定。

平成 21 年度日本ギャスケル協会第 2 回役員会報告

日時：平成 21 年 10 月 3 日（土）午後 1 時より 3 時まで、会場：日本大学法学部本館 2 階第 2 会議室、出席者：鈴江璋子、東郷秀光、阿部美恵、石塚裕子、熊倉朗子、木村正子、関口章子、多比羅眞理子、波多野葉子、諸坂成利、矢次綾、（オブザーヴァーとして、江澤美月、小泉朝子、鈴木美津子、長浜麻里子）　欠席者（委任状提出）：市川千恵子、井出弘之、大野龍浩、島高行、直野裕子、廣野由美子、松岡光治、松村豊子、議題：1、入退会、退会：佐々木礼子、2、役員改選および倫理規定につき、前回の確認がなされた。なお、論文審査委員は次号（第 20 号）より、多比羅眞理子、大野龍浩、廣野由美子の 3 氏を継続とし、補充の候補として大島一彦、鈴木美津子、阿部美恵の 3 氏の名があがり、すでに鈴木、阿部両氏からは同意を得られたとの報告があった。審査委員は 6 名。なお論集編集委員会委員長は、松村豊子氏。3、平成 22 年度行事予定：第 22 回例会は、2010 年 6 月 5 日（土）午後 2：30 より日本大学法学部本館第 1 会議室にて開催。総合司会、長浜麻里子氏、研究発表、齊木愛子氏、小泉朝子氏、講演、東郷秀光氏等が決定された。また第 22 回大会は、10 月 3 日（日）午前 10 時より実践女子大学にて開催、講演、鈴江璋子氏等が決定された。大会運営委員長には多比羅眞理子氏。『英語青年』への広報担当には江澤美月氏。4、事務局報告：ニューズレター第 22 号編集担当、矢次綾氏、ホームページ担当、熊倉朗子氏、5、ギャスケル展について多比羅事業計画委員長より提案がなされた。また *The Gaskell Journal*（英国協会）につき事務局より、英国から多少余裕のある部数を送るよう交渉するとの報告があった。英国協会用の名簿は、事務局長が管理する。

平成 21 年度日本ギャスケル協会総会報告

1．役員改選の件：下記人事が承認された。

第 10 期着任、第 11 期任期満了役員〔平成 18 年 4 月～ 22 年 3 月〕

会　長　　鈴江璋子

副会長　　東郷秀光

幹　事　　市川千恵子　井出弘之　木村正子　関口章子　多比羅眞理子　波多野葉子　松岡光治
島高行（第 11 期着任）

会計監査　金丸千雪　斉藤南子

第 12 期着任役員〔平成 22 年 4 月～ 24 年 3 月〕

会　長　　多比羅眞理子

副会長　　大野龍浩

幹　事　　第 11 期着任、第 12 期再任
阿部美恵　石塚裕子　熊倉朗子　廣野由美子　松村豊子　矢次綾
第 12 期着任
江澤美月　大島一彦　大嶋浩　木村晶子　小泉朝子　鈴木美津子　田中孝信　長浜麻里子

事務局長　諸坂成利

2．倫理規定の件：下記規定が承認された。

日本ギャスケル協会倫理規定

日本ギャスケル協会は、協会設立の目的を推進するために、以下の規定を定める。

1．会員は、人種、国籍、性別、障害などのいかんにかかわらず、すべての人に対して公平かつ誠実に行動しなければならない。
2．会員は、学会内外の活動において、すべての人のプライバシーおよび人権を尊重し、社会人としての規範を守らなければならない。
3．会員は、他の研究者の研究・調査および発表・発言の自由を尊重しなければならない。
4．会員は、研究成果を公表する際、盗用、改竄、その他不正な行為をしてはならない。
5．『ギャスケル論集』に掲載された論文は、著作権は投稿者に、版権は日本ギャスケル協会に帰属する。
『ギャスケル論集』に掲載された論文を著書などに収録する際は、その旨、断り書きをする。

3．投稿規定の件：下記規定が承認された。

『ギャスケル論集』投稿規定

【資　格】投稿者は日本ギャスケル協会会員であることを原則とする。
【内　容】原稿はエリザベス・ギャスケルおよびその周辺に関する研究とし、未発表のものに限る。
ただし、すでに口頭発表し、その旨明記している場合は審査の対象とする。
【執筆要項】
1）書式は *MLA Handbook for Writers of Research Papers* の最新版に準ずる。
2）原稿は原則として Microsoft Word で作成し、1 ページは 36 字 ×30 行とする。執筆用テンプレートが協会のホームページにあるので利用されたい。
3）日本語原稿の場合は 14,000 字以内（スペースを含める）とし、別に英訳題名をつけ、200 ～ 300 語程度の英文による要約をつける。
4）英語原稿の場合は 6,000 語以内（スペースを含める）とする。要約は不要。
5）日本語原稿、英語原稿とも、題名、注、文献目録その他一切を規定文字数のうちに収める。
6）注は本文中に算用数字で表記し、本文の最後に通し番号でまとめる。注番号にはカッコは使用しない。
【締　切】3 月末日。
【提　出】原稿の印刷コピー 3 部を事務局に提出する。同時に、ファイルを電子メールに添付して事務局に送付する（FD、MO、CD、USB メモリを送付してもよい）。氏名は原稿には記載せず、ローマ字表記、略歴、連絡先とともに、別紙で提出すること。原稿は返却しない。
【審　査】原稿掲載の可否は論文審査委員会が決定する。審査の公平と査読者の自由な知見を守るために、査読者の氏名は公表しない。
【校　正】執筆者の校正は初校までとし、訂正加筆は印字上の誤りのみとする。

細則
1. 抜刷代は執筆者が負担する。
2. 執筆者に掲載料の負担が発生する場合がある。
3. 掲載された論文は一定期間を経た後に電子化され、インターネット上に公開される。公開を望まない場合は、事務局に申し出ることにより、非公開とすることができる。

4．会計報告：事務局長より会計報告があり、承認された。

5．その他：ギャスケル展について多比羅事業計画委員長より提案がなされた。また *The Gaskell Journal*（英国協会）につき事務局より、上記役員会同様の報告があった。各種報告事項の後、鈴江会長、東郷副会長、および『ギャスケル全集』刊行にご尽力下さった大阪教育図書横山社長夫妻に、協会より花束と記念品の贈呈があった。また当日の懇親会は『全集』完成祝賀会を兼ね、神保町・新世界菜館にて盛大に開催された。

平成 20 年度日本ギャスケル協会会計報告（2008 年 4 月 1 日～2009 年 3 月 31 日）

PDF 版につき省略致しました。

日本ギャスケル協会　平成 22 年度例会のご案内

日　　時：2010 年 6 月 5 日（土）午後 2：00 より
会　　場：日本大学　法学部　本館 2 階第 1 会議室

プログラム：
研究発表　司会　島高行（実践女子大学教授）
「『シルヴィアの恋人たち』における「循環」の構造」　齊木愛子（熊本大学大学院生）
「ギャスケル作品における母親の表象」　小泉朝子（早稲田大学［非］）
講　　演　司会　松村豊子（江戸川大学教授）
「研究の方法、研究の意義を求めつつ」　東郷秀光（慶応義塾大学名誉教授）

会員の皆様には会場、プログラムなどの詳細をこのニューズレターに同封しております。会員外の方もお誘いあわせの上、是非ご参加ください。

＊平成 22 年度大会は 10 月 3 日（日）、実践女子大学にて開催されます。シンポジウムは直野裕子氏（甲南女子大学名誉教授）がコーディネーターとなり、「ギャスケルと同時代の女性作家たち」（仮題）というテーマに基づき準備を進めております。パネリストは芦澤久江氏（静岡英和学院大学短期大学部教授）、廣野由美子氏（京都大学教授）、松本三枝子氏（愛知県立大学教授）です。また、鈴江璋子前会長・実践女子大学名誉教授のご講演も予定しております。多比羅眞理子氏が報告されている通り、大会に合わせて『エリザベス・ギャスケル生誕 200 年記念論文集』の発行と「エリザベス・ギャスケル生誕 200 年記念展」も企画されております。

平成 22 年度事業計画報告

エリザベス・ギャスケル生誕 200 年を記念して、イギリスでは 3 月から 11 月までの長期にわたりマンチェスターやナッツフォードでさまざまな展覧会や講演会が開催され、イタリアでは 9 月 30 日と 10 月 1 日に短編小説をテーマにした国際大会が企画されています。日本でも平成 22 年度の事業計画として、ギャスケルの生誕を記念する次のような 2 つの計画を立てました。現在それぞれの準備が着々と進んでおります。

1．『エリザベス・ギャスケルと英国小説の伝統―生誕 200 年記念論文集―』（仮題）の発行
鈴江璋子前会長のご発案で、従来の作品論中心の研究書ではなく、文体や物語論、人間関係、社会、演劇的要素やフェミニズムなど 7 つのテーマに従って論を進めるという今までにない画期的な研究書を発行します。大野龍浩副会長を委員長とし、33 名の会員が論文を提出、査読を受け、9 月 27 日の生誕日発行を目指しております。『ギャスケル全集』と同じ大阪教育図書株式会社から出版されます。

2．本年度大会開催校である実践女子大学の実践英文学会との主催で下記の要綱で「エリザベス・ギャスケル生誕 200 年記念展」を開催します。この展覧会では、古くは昭和初期の翻訳書、また、1800 年代にイギリスで出版されたギャスケル全集や作品集の稀覯本、さらにはヴィクトリア朝時代のドレスや帽子を展示して「ギャスケルの世界」をより深く、多面的に紹介します。

「エリザベス・ギャスケル生誕 200 年記念展」

主　　催　　日本ギャスケル協会・実践英文学会
期　　間　　2010 年 9 月 27 日～ 10 月 3 日
会　　場　　実践女子大学香雪記念館展示室 1、2
〒191-8510　東京都日野市大阪上 4-1-1

主な展示品　・エリザベス・ギャスケルの著書、全集
・翻訳書（日、仏）と英、米、日の研究書
・DVD による「エリザベス・ギャスケルの生涯」の放映（製作：大野龍浩氏）
・ヴィクトリア朝時代のドレス・帽子（4 点）・・・文化学園服飾博物館所蔵品

入場料無料

（多比羅眞理子）

編集後記

・会長、副会長の交代という日本ギャスケル協会の節目を迎えるにあたり、多比羅眞理子新会長、大野龍浩新副会長、鈴江璋子前会長が、ご多忙中にも関わらず本号に寄稿してくださいました。また、阿部美恵氏、熊倉朗子氏は、大会および例会報告原稿を快くご執筆くださいました。大会および例会の写真は大野龍浩氏よりご提供いただきました。心より感謝いたします。
・編集を引き受けたものの、こういった仕事は初めてで右も左も分からず、おろおろしている私に、新会長、新副会長、前会長、諸坂成利事務局長、市川千恵子前編集長が惜しみないご助言とご協力をくださったことにも深く感謝いたします。また、校正は複数人で行った方がよいであろうという新会長のお心遣いにより、この点に関しまして江澤美月氏のご尽力を得ることができました。何とか第 22 号発行の運びとなりましたのも、みなさまのおかげです。ありがとうございました。

（編集　矢次　綾）

発　行：日本ギャスケル協会
〒101-8375
東京都千代田区三崎町 2-3-1
日本大学法学部　諸坂成利研究室内
日本ギャスケル協会事務局
03-5275-8730
URL: http://wwwsoc.nii.ac.jp/gaskell/
e-mail: smorosak@law.nihon-u.ac.jp

発行日：2010 年 5 月 1 日